

天龍寺における後醍醐天皇の供養とその政治的背景

——夢窓疎石を中心に

モリー・ヴァラー

京都嵯峨の天龍寺は、後醍醐天皇（1288-1339）の菩提を弔うことを目的として建立されたとされる。1345年の落成の法要を行ったのは天龍寺開山の夢窓疎石（1275-1351）という禅僧であった。これまで、後醍醐天皇7回忌に合わせて行われた「陞座」という法要が注目を集めてきたが、夢窓疎石の最後の法要である後醍醐天皇13回忌（1351年8月16日）の方はあまり注目されてこなかった。

1351年は夢窓疎石が死去した年にあたる。『天龍開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜』によると、後醍醐天皇の13回忌の直前、天龍寺が漸く完成し、大変な高齢であった夢窓は、13回忌を開催するために、再び天龍寺の住職をつとめたという。実際、13回忌の翌日には住職を辞し、翌9月30日には死去しているので、体調がすぐれない中での法要であったのだろう。この1351年は政治的に混乱した1年であった。「陞座」の直前の観応の擾乱により、足利尊氏（1305-1358）と直義（1306-1352）の関係は急変しており、2人が出席した1345年の7回忌とは政治的背景が異なった。

本報告では、後醍醐天皇、天龍寺、夢窓疎石の関係を分析し、当時の政治状況の変化を踏まえながら、夢窓疎石の主催した天龍寺における後醍醐天皇13回忌を取り上げ、中世における政治的な諸問題を考察した。